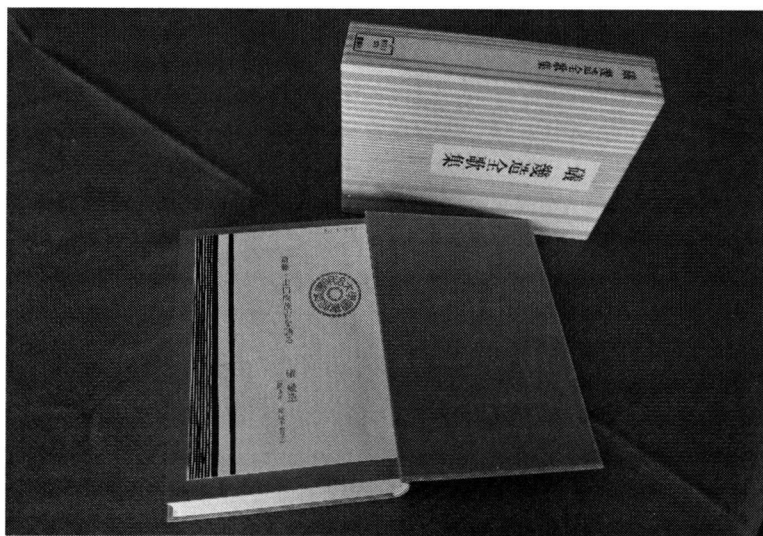


いそいくぞう
『儀幾造全歌集』

玉井 崇夫*



昨秋、『儀幾造全歌集』（短歌新聞社、平成23年8月28日発行）が明治大学中央図書館に寄贈された。本稿はその経緯を語り、すでに図書館所蔵の『山口茂吉日記』との関連を示すことに目的がある。まずは兎も角、『全歌集』の概要を紹介しておこう。

今ここに月刊誌「短歌現代」平成23年11月号がある。「特集・儀幾造の歌」4ページが組まれており、次のような見出し記事がある。

*たまい・たかお／明治大学文学部教授

《平成二十二年に九十三歳の天寿を全うした礒幾造は大正六年東京に生まれる。斎藤茂吉・山口茂吉直門として写真短歌を忠実に継承し、歌誌「表現」を創刊主宰した。このほど、氏の全作品を収めた『全歌集』が刊行となった。その作品世界を味読する。》

そして、四歌誌の代表者から追悼文（講評）が寄せられている。それぞれに礒の数首を引用しながら論じられているが、取りあげた歌は各自まちまちである。ところが、異口同音に唱えられた礒の人物評が等しく「斎藤茂吉・山口茂吉直門」として位置づけられている。

「斎藤茂吉の傍らにあつてその作品活動を支えた山口茂吉の姿はそのまま形を変えてその膝下にあつた礒幾造へ投影されている。」（来嶋靖生）

「斎藤茂吉から言えば、礒幾造は孫弟子という関係になるのであつて、礒幾造に期待をし、よろこんでいたようだ。」（石原光久）

なるほどなと思う。礒と山口の経歴を略記しておく。

礒幾造（1917－2010）は、山口茂吉に師事して、「アザミ」創刊に参加し、病身の山口を支え、編集校正の手伝いばかりか日常の看護にも献身した。山口の死後は「表現」を創刊主宰し、アララギ派の写真の伝統を引き継いだ。歌集11冊と評論随想集4冊がある。

山口茂吉（1902－58）は、偶然にも同じ名前を持つ斎藤茂吉の高弟で、「アララギ」の編集発行に携わったほか、師茂吉の口述筆記、手紙の代筆、原稿整理、校正なども手伝った人物である。同門の芝生田稔や佐藤佐太郎と比べても、もともと師茂吉の身辺近くにあつた。歌集「杉原」「赤土」「海日」「高清水」「鉄線花」。「アザミ」主宰。

こうして並べて見ると、斎藤茂吉と山口茂吉、山口茂吉と礒幾造、二組の師弟関係はとてもよく似ている。斎藤茂太は当時の山口が「父の秘書」のように見えたと言っている（『茂吉の体臭』岩波書店）。後ほど詳述するように、礒は、斎藤が山口に論じた「縁の下力持ちたれ」を自らもまた座右の銘としたようである。技芸の伝承において、現代が等閑に付した精神は、この公私にわたる師弟の深い絆かもしれない。

ところで、もう十年近く前、本誌「図書の譜」第7号に筆者玉井は『山口茂吉日記』について書いた。話が遠回りするが、こちらの方の経緯についても少し触れておかなければなるまい。

当時、ある個人的な関心から、斎藤茂吉の日記（岩波書店）を精読しており、それを補完する資料として山口茂吉の「日記」の存在に注目した。この「日記」（大正14年～昭和33年）は、山口自身の日録というより、殆どの日が師の斎藤茂吉やアララギに関する記事で埋められていたからである。

山口は生前これを自らの主宰誌「アザミ」に公表し、死後は山口に私淑していた加藤淑子氏が引継いで「アララギ」に翻刻発表した。しかし残念ながら、全体の三分の一が連載されただけで、残りの三分の二は未発表のまま中断されることになった。結局その後、「アララギ」は1997年12月号をもって廃刊となり、膨大な紙数を要する「日記」の発表の場が完全に失われてしまった。「日記」が斎藤茂吉やアララギの研究に貴重な資料となることは、前述したとおりである。

明治大学はアララギと案外深い人脈を持っている。そもそも「アララギ」を創刊した求心的人物の伊藤左千夫は明治法律学校の入学生初年度（中退）であり、土屋文明、芝生田稔の両先生は本学教授であり、斎藤茂吉の長男茂太は明治大学文芸科の卒業生である。斎藤茂吉の日記（昭和14年4月30日）には「吉田甲子太郎氏アイサツ」とある。いずれも明治大学に所縁のある人物である。山口茂吉の「日記」の完成は明治大学にとって意義ある宿題と判断された。そこで、日記原本を所有する加藤淑子氏の協力を得て、本学人文科学研究所の重点共同研究（1998年－2000年）の成果として、2002年3月、『山口茂吉日記』全8巻とCD-ROMを完成公表した。

閑話休題。話を戻そう。

『礒幾造全歌集』は、著者の長女で現「表現」編集発行人である結城千賀子氏が、故人の歌業の集大成として6363首を収録編集したものである。巻末に「年譜」「解題」「発句索引」が付されている。それとは別に、「斎藤・山口両茂吉を語る 礒幾造」と題された19ページの冊子が挟み込まれている。これは礒が亡くなる二年前に、山口茂吉没後五十年の記念企画として、「表現」4月号－5月号に掲載したインタビューを再録したものである。いわば『全歌集』のおまけともいえる付録（編者は「栞文」と呼んでいる）である。

実は、筆者はこのインタビュー記事に、特に山口の「日記」と共鳴する箇所に、考証的な興味を強く引かれたのである。以下に、いくつか拾って

みよう。

磯は山口との出会いについて、「昭和20年春には召集され、茨城の駐屯地にいたが、短歌を諦めきれず、山口先生に自作を添えて入門を請うた」ことが、師弟の絆の始まりだったと懐旧している。インタビューで次のような対話がなされている。



写真の二人は、前方が山口茂吉、後方が磯幾造

—その時の歌稿が保存されていますが、山口先生の朱が入っていて、端に返事が書いてありますね、丁寧な字で。

磯 懐かしいね。当時は郵便事情も悪く、山口先生から返事を頂いたのは、五十日近くたった終戦の日の翌日だった。山口先生は斎藤先生の助手を第一と心得ておられたので、本来弟子はとらぬおつもりだったらしいが、お国の為に軍務精励の身で大学の同窓というので、入門が許された。生きる拠り所を得た思いだったね。

この印象的な出会いは「昭和20年」のいつだったのだろうか。

『山口茂吉日記』に当たってみると、昭和20年7月30日に「未知の人、

磯幾造氏（中大出、応召海軍兵）より歌の指導を受けたき旨の手紙あり。」の記述があった。そして8月12日の日記下方の（発信）欄に「磯幾造」の名前が書きつけられていた。本文に関連した記述はないが、これが歌稿に「朱が入って」「丁寧な字で」したためられた返事と思われる。そうすると、山口は「未知の人」から手紙を受けて二週間おいて返事したということになる。この返事は「終戦の日の翌日」すなわち四日後の8月16日に磯の手許に届いているので、磯が「当時は郵便事情も悪く」「五十日近く」待ちかねていたという、その一ヶ月以上は、磯本人の手紙が届くのににかかったということなのである。『山口日記』を読み合わせると、そんな隠れた時代背景が判って、面白い。

因みに、それ以後は10月2日と12月18日の（受信）欄に「磯幾造」の名前が見られる。磯から添削を求めた歌稿が送られて来たと考えられる。次いで12月20日、「夜、明日発信すべきハガキ手紙二十通書く。磯氏の歌等添削す。」の記事があり、翌21日の（発信）欄に「磯幾造」の名前が書かれている。

もう少し『山口日記』を追ってみると、翌年の昭和21年1月28日に、「先生よりハガキ来る。大石田町よりなり。但し引越されしか、来月初めなるを既に新住所を書かれしか、恐らく後者ならむか。」の記事がある。（受信）欄を見ると、そこに書かれた名前から、この日、二通の来信があったことが分かる。一通は上に引用した斎藤茂吉からのハガキで、もう一通は磯からのものであった。磯の晩年の歌に「地下足袋穿き愛弟子見舞ふと来給ひし斎藤先生にわが見えにき」（『遠山の空』所収）、「孫弟子のわれ励ましくれし斎藤先生そのみ言葉を今に忘れず」（『夕丘』所収）などがある。昭和23年から24年にかけて、山口は結核を再発して自宅療養していたが、斎藤が再々見舞いにやってきた。昭和25年の正月、磯は山口のお供で世田谷代田の斎藤を訪れた。いずれもその頃を回想して詠んだ歌である。が、磯はそうして老師と見まえたよりも以前に、いわば山口の「日記」の中で、すでに斎藤と引き合わされていたのであって、（受信）欄に並んだ二人の名前を眺めていると、溜息の出るような運命的な出会いの予感が感じられるのである。

磯は除隊後、山口県平松の日立製作所笠戸工場に帰任して、山口と親密

な文通が交わされる。昭和21年には、上記の1月28日を含めて28回（つまりは磯の方にも同じくらい）の送受信があったことが分かる。二人が初めて会ったのは、5月5日だったようだ。

「五月五日（日）小雨。公休。

昨夜来下痢烈しく臥床す。…午後下松より上京の磯幾造君来訪。同君の歌を見ること数ヶ月でなるも相見るは初めてなり。筈二本土産に持参せらる。下痢のため物を見ること、聞くこと、言ふこと、考ふことすべて物憂し。」

昭和22年、磯は東京本社勤務となって、「足繁く麻生の山口先生宅を訪ねるようになった」とインタビューで語っている。

「当時私が30歳、山口先生は45歳だった。…三日にあげず伺って、その枕許に坐り込んで、当時の政治や社会を論じて勝手な熱を上げたり、床の間の夥しい雑誌や本の整理をしたり、時には先生の口授で簡単な代筆をすることもあった。逆に一週間も伺わないと、会社に呼び出しの電話がかかってきたよ。」

昭和22年の『山口日記』には、磯に関する本文の記事が43日あり、（発信）（受信）欄の名前のみは19日、合わせて66日の日記に何らかの磯の消息が記されている。

紙数が尽きたので、これ以上具体的に例示できないのが残念であるが、この20ページ足らずのインタビュー記事によって、山口の日記の不明や疑問の箇所が部分的にも明らかになった。少なくとも磯との出会い以後、すなわち戦後の記述（おそらく『斎藤茂吉日記』についても）を読み深める手掛りとなったことはありがたい。今後、アララギひいては詩歌史の貴重な証言となってくれることを期待したい。

ところで、磯幾造は生前に日記をつけていたのだろうか。もし日記があつて残っているならば、斎藤茂吉、山口茂吉の系譜となるアララギの枝葉の翳は深まり、そこに光を照射する楽しみが増すのであるが。